

18日 金曜

ルカ

13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えられました。

13:11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできなない女がいた。

13:12 イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました。」と言って、

13:13 手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。

13:14 すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」

13:15 しかし、主は彼に答えて言われた。

「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほだき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。」

13:16 この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」

13:17 こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。

13:18 そこで、イエスはこう言われた。

「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。」

13:19 それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」

13:20 またこう言われた。「神の国を何に比

べましょう。

13:21 パン種のようなものです。女がパン種をとって、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」

律法は神様の義を表すもので、それ自体は良いものです。しかし律法を守り通すことはできないので、律法によって救われる人は1人もなく、誰でもあっても律法の前には不完全な自分を嘆くことになるはずで

す。しかし当時の宗教の専門家、すなわち律法学者やパリサイ人、そしてこの会堂管理者もそれでは立場が守られないので、外面的や形式的に律法を守り、権威を保っていました。「安息日にはいけない。」というのもその表れです。

ところでイエス様が悪霊追い出しや癒しのわざをさなした目的は、旧約に預言されたわざを行うことによって御自身が救い主であることを明らかにするためでした。つまり救いのわざであり、解放のわざです。

ここに律法による救いと、恵による救いの違いがあります。前者は不可能であり形式だけになります。後者は唯一の救いの道であり、形式ではなく愛によるわざです。「反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、…喜んだ。」とあるのは、この愛のわざのすばらしさに気づいたからでしょう。

私たちも律法主義、すなわち形式的、外面的な保身に陥っていないか省みる必要があります。恵に感じて、また応答して神様と交わって歩んでいるか、心を探ってみる必要があります。

それには立派なまたは偉大な信仰者になる必要は必ずしもありません。神の国、すなわち神の支配は私たちにいのちを与えますから、そのいのちが生きている以上、成長するのです。からし種のように小さくても、聖霊のいのちをいただければ必ず大きくなるのです。成長するものでありましょう。



①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

